

現代社会と中世の出会い

— 圃場整備を前にした中世村落史跡 —

井田 寿邦

今の大阪府泉佐野市大木は、少し離れた土丸も含めて、昔は和泉国日根郡入山田村と呼ばれていました。これらの地域は、この昔の名前の如く、平野部から山へ入った所にあります。鎌倉時代の1234年には、平野部の日根野村さらに井原村と鶴原村も加えて、摂政・関白を勤める九条家の荘園となり、日根荘（ひねのしょう）と呼ばれるようになりました。現在の泉佐野市域の大半にあたります。

南北朝の内乱を経た後の室町時代には、入山田村と日根野村だけが九条家に残され、さらに時代の推移とともにその維持も困難になっていきました。そして九条家にとって稀少となったこの荘園を死守するため、1501年4月に前関白九条政基が京都から大木に移り住んできます。それは泉佐野市域あたりを舞台に、根来寺方と守護方とが戦闘を繰り返していた時期でもありました。

以来、四年間、彼は入山田村の長福寺に籠もり、支配を立て直すために血道をあげていきます。そしてその間、彼は日記を書き続けていきます。それは現在、公刊され、『政基公旅引付』とか、単に『旅引付』とか呼ばれ、また『新修泉佐野市史』のなかの一冊として読み下し文も作られています。この日記のなかには、九条政基の耳目を通じてですが、戦国時代の実に多様な様相が記されていくこととなります。刻々と変化する当時の政治情勢や軍事情勢などは勿論ですが、特に個々の農民の具体的な立ち居振る舞いが、また農民群の動きが、地域をめぐる状況の変動とともにリアルタイムで記されていることは極めて貴重で、全国的にみても唯一の例といえます。さらに大木にかかわる鎌倉時代の、日根荘が成立した当時の田についての記録も残されています。

そして今一つ重要なことは、かつての入山田村の地域が最近まで大規模な「開発」の波を受けておらず、今に至るまで連綿と農林業の営みが続けられ、昔からの村の景観などを持ち伝えてきていることです。もちろん今、私達が目にする景観は、鎌倉時代や戦国時代の景観ではなく現在の景観です。しかし今ある景観のなかに、たとえば500年ほど前の人々の生活や信仰、笑いや涙、雄叫び、呻き、喘ぎなどをうかがい知ることができるわけです。

たとえば外部の軍勢の侵入に備えて村の若衆が警戒した谷筋とか、通過する軍勢が駐屯している辺りなどを知ることはできますし、また軍勢の侵入を前に激しく鐘が打ち鳴らされた円満寺や西光寺、蓮華寺、あるいは雨乞いの儀式を行い、また軍勢の陣取りを前に入山田村のおとな衆が会合を持った火走神社は村の方々の信仰に守られて今もあります。村の主だった人々が寄り集まって九条政基に対する手立てを講じたであろう毘沙門堂もあります。また大雨で灌漑用の樋が流され、村の人々は上之郷や長滝など、下流の村の人々の協力を得てその曳きあげをはかっていますが、どこから流れたのか、その

樋のかかっていた箇所もわかってきています。そして、現在、行われている水利作業などとあわせると、当時の田の広がりも推測することもできます。家々の所在もかなり絞り込むことができている。さらに飢饉の有様、夜盗の出現を前にして若衆の夜警と犯人の追尾、等々、村の中での出来事を今ある景観のなかにダブらせることもできます。

すなわち現在の大木は、今ある景観のなかに中世と呼ばれた時代の人々の生き様が具体的に、それぞれの場所を特定しながら汗や涙、笑いなどとともに感じ、また探ることのできる景観を抱えているわけです。言ってみれば今ある大木の村落景観全体のなかで、いわば現在の日本の一つの原点を具体的に知りうる全国唯一の地域ということになります。だからこそ日本で初めて日根荘遺跡として国史跡の指定を受けたものだと思います。ただし現行の法律内では幾つかの地点を指定するという形が取られ、大木では円満寺・火走神社・毘沙門堂・蓮華寺・香積寺跡が国史跡として指定を受けています。

ところが現在、この大木地域を対象に「農村振興総合整備事業」が計画されています。農村振興総合整備事業とは、大木地区では生産基盤の整備、平たく言えば「圃場整備」です。国史跡のある地域で圃場整備の計画とは少し奇異な感じもしますが、これが現実です。

この計画の背景には大木が抱えている農業従事者の高齢化と兼業化、若者の農業離れ、農地の荒廃という問題があります。また農業を維持していくためには機械化に対応していくことも必要です。そして現在、市が描いている圃場整備は、今ある田の区画や用水路をなくし、新たな田の区画や水路網と道を作り出す土木工事です。

ただそこには大木の将来の農業のあり方、新たな村づくりがみえてきません。将来の農業のあり方、村づくりがみえないまま大木で「農村振興総合整備事業」がなされても農業従事者の高齢化と兼業化、若者の農業離れ、農地の荒廃という問題はそのまま残され、一方では昔をイメージできる、全国的にみても希有な景観は永久に失われてしまうこととなります。現状ではその危惧を払拭することはできません。

中世を彷彿とさせる村落景観を積極的に生かしてこそ大木の新しい村づくりができるのではないかと私は提案しています。どのような道を選択するか、「中世」に出会った現代社会が問われているようです。

(泉佐野の歴史と今を知る会事務局長・大阪府立泉南高等学校教諭)



大木地区の中世を彷彿とさせる村落景観